HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	慈済会信徒のエスニシティーと社会階層は多様化しているのか？：TSCS-1999/2004/2009の分析
Author(s)	寺沢, 重法
Citation	2014年度「宗教と社会貢献」研究会第二回研究会報告要旨.2015年1月12日.関西学院大学梅田キャンパス
Issue Date	2015-01-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/57699
Type	conference presentation
File Information	terazawa20150113.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

慈済会信徒のエスニシティーと社会階層は多様化しているのか？
――TSCS-1999/2004/2009 の分析――

2014 年度「宗教と社会貢献」研究会第二回研究会
2015 年 1 月 12 日、関西学院大学梅田キャンパス
寺沢　重法（北海道大学大学院文学研究科）
shterazawa@let.hokudai.ac.jp

【報告要旨】

【目的】台湾の慈済会の信徒のエスニシティーと社会階層は多様化しているのかどうかを代表性の高いサンプリングデータの分析を通じて検討することが目的である。**【背景】**慈済会は現代台湾を代表する仏教系ボランティア団体である。そのインパクトの大きさから、慈済会は、これまで社会参加仏教、宗教と利他主義、市民社会形成に寄与する宗教団体、新宗教運動などの様々な観点から研究されてきた。近年は慈済会信徒の特徴に関する研究も行われており、主として慈済会信徒の１）宗教性の特徴、２）利他的行動の特徴、３）政治的価値観・行動の特徴、４）社会的属性（社会階層やエスニシティー（族群））の特徴が分析されてきた。本発表はこの中の４）を扱う。近年の台湾を対象としたボランタリー組織所属や宗教性に関する計量的研究では、いずれについてもエスニシティー差・社会階層差が見られるという知見、差は見られなくなりつつあるという知見など様々な知見が出されている。慈済会の信徒は、設立当初は閩南系本省人、自営業者などが中心だったが、その後は多様化が進んでいることが指摘されている。しかし、代表性の高いデータから慈済会信徒のエスニシティーと社会階層の多様化を確認した研究は行われていない。**【方法】**「台湾社会変遷基本調査」の 1999 年、2004 年、2009 年に実施された宗教モジュールを使用する。慈済会信徒の指標としては慈済会への所属有無、エスニシティーは「閩南系本省人」「客家系本省人」「外省人」の 3 カテゴリー（原住民（先住民族）はケース数が少ないため除外）、社会階層は「教育年数」「職業（社会経済指標）」「世帯月収」に主成分分析を行って抽出された第 1 主成分を用いた。分析対象者は 20～66 歳の男女有職者、分析は男女別に行った。分析手順は、まず信徒数の変化および二変数間関係（平均値比較・クロス集計）を確認した後に、慈済会所属有無を従属変数とする二項ロジット分析を行った（実年齢を統制している）。**【結果】**１）信徒数は約 10%であり（2004 年で一時減少）、他の四大仏教（仏光山、法鼓山、中台禅寺）の中で最も多い。信徒には男性より女性の方が多い。２）エスニシティーは、全体としては閩南系本省人が中心だが、女性では客家系本省人や外省人にも増加傾向が見られる。社会階層は、1999 年時点では男性信徒・女性信徒ともに、それぞれ男性全体・女性全体より階層は高めである。ただし 2009 年では男性信徒は依然として階層が高い一方、女性信徒は女性の全体よりも階層が低い傾向がある。2004 年は変則的である。３）二項ロジット分析の結果、男性信徒では閩南系本省人に比べて外省人が有意に少ない傾向および社会階層が高い傾向は、10 年間で大きく変わらない（2004 年を除く）。一方、女性信徒については 1999 年では閩南系本省人に比べて外省人が有意に少ない傾向が見られたが、2009 年時点では有意差は確認できなかった。社会階層についても 1999 年では社会階層が有意に高かったが、それ以降、有意な関連は見られない。**【結論】**1999 年から 2009 年の間で、女性信徒については社会階層・エスニシティーの差は徐々に見られなくなる傾向にある。一方、男性信徒については、エスニシティー差、高階層者が多いという傾向も依然残っている。女性の場合は、慈済会は幅広い社会層の人々に開かれた団体になってきているが、男性の場合は必ずしもそうとは言い切れないことが推察される。

【謝辞】本発表では「台湾社会変遷基本調査」の第 3 期第 5 次、第 4 期第 5 次、第 5 期第 5 次調査データを使用した。「台湾社会変遷基本調査」の調査主体は中央研究院社会学研究所（台湾）であり（第 3 期第 1 次調査以前の調査主体は台湾中央研究院民族学研究所）、中華民国行政院国家科学委員会の支援を受けている。また、本発表は日本学術振興会科学研究費（若手研究 B）「台湾における宗教と利他主義に関する社会学的研究」（研究代表者：寺沢重法）、ならびに日本学術振興会科学研究費(基盤研究 B)「東アジアにおける宗教多元化と宗教政策の比較社会学的研究」(研究代表者：櫻井義秀)の一環として行われたものである。さらに、本発表は中央研究院社会学研究所（台湾）の訪問学人（2012 年 7 月～9 月）として行った研究成果の一部である。在外研究に当たっては、北海道大学大学院文学研究科「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」の支援を受けた。